

小中一貫校・非一貫校における子どもの適応・発達 (19) —リーダーシップに着目して—

○都筑 学 (中央大学)
金子泰之 (静岡大学)

岡田有司 (東京都立大学)
高坂康雅 (和光大学)

キーワード：小中一貫教育，リーダーシップ，横断研究

問題と目的

小学校 6 年と中学校 3 年の計 9 年間にわたり、系統性・体系性のある教育課程を編成し、9 年間の教育目標を設定する小中一貫校には、施設一体型・施設隣接型・施設分離型という 3 つのタイプがある。高坂他 (2014・2015・2017) は、施設一体型の小中一貫校と非一貫校の比較をおこない、適応や精神的健康、レジリエンス、ソーシャル・サポートなどに関する検討をおこなってきた。

本研究では、2018 年度から開始した縦断調査の初年度のデータにもとづき、リーダーシップに関して小中一貫校（施設一体型）と非一貫校を比較することを目的とする。

方 法

調査対象者 施設一体型小中一貫校 9 校 1,308 人、非一貫小学校 17 校 1,469 人、中学校 7 校 2,370 人

調査内容 リーダーシップ：上村・鹿嶋 (2017) を参考にしながら、「主体性」仲を取り持つ」「主張性」の 3 下位尺度 (3 項目ずつ) を独自に作成した。

結果と考察

リーダーシップに関する 3 下位尺度得点について、学校形態 (2) × 学年 (6) の 2 要因の分散分析をおこなった。全ての下位尺度について有意な交互作用が認められたため、単純主効果検定を行った。

主体性については、4 年生・8 年生では一貫校の方が得点は高いが、6 年生・7 年生では非一貫校の得点が高くなっていた (Figure 1)。仲を取り持つについては、4 年生では一貫校の方が得点が高かったが、7 年生では非一貫校の方が得点が高かった (Figure 2)。主張性については、5 年生・6 年生・7 年生において、非一貫校の方が一貫校よりも得点が高かった (Figure 3)。

以上の結果から、4 年生の段階ではリーダーシップは一貫校の方が高かったが、5～7 年生になると非一貫校の方がリーダーシップの得点が高くなり、8・9 年生では一貫校と非一貫校の差がほとんど見られなくなる傾向にあることが明らかになった。このことから、一貫校と非一貫校における学校制度の違いが児童・生徒のリーダーシップに影響を与えている可能性が示唆されたといえよう。

一貫校は、1 年生から 9 年生までの学年構成になっており、非一貫校のように小学 1 年生から 6

年生、中学 1 年生から 3 年生という区分がない。そのために、一貫校においては、小学校の高学年にあたる児童が、上級生として活動したり、役割を担うという経験が少なくなるということが知られている。そのことがリーダーシップの発達に影響しているのではないかと考えられる。

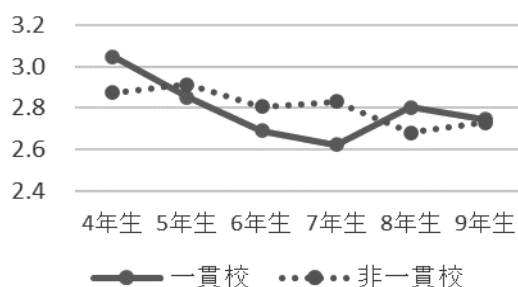


Figure 1 「主体性」得点の平均値

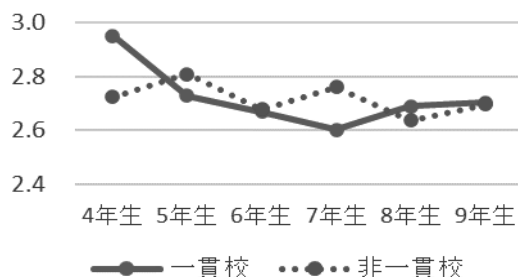


Figure 2 「仲を取り持つ」得点の平均値

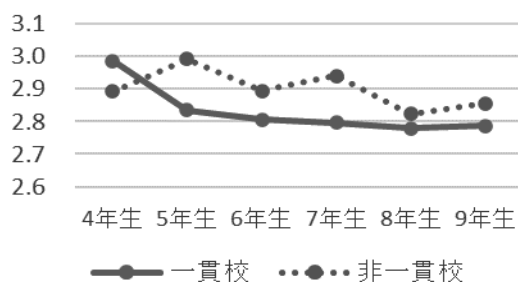


Figure 3 「主張性」得点の平均値

付 記

本研究は、科研費（基盤研究（B）課題番号 18H00981：代表・梅原利夫）の助成を受けた。